

夢は

トリノを

かけめぐる

東野圭吾

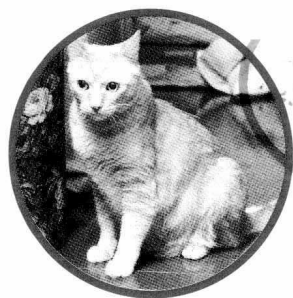


東野圭吾

光文社

夢は
トリノ
かけめ

蘇工業学院図書館
蔵書章



東野圭吾（ひがしの・けいご）

1958年、大阪府生まれ。1985年、『放課後』で第31回江戸川乱歩賞を受賞。1999年、『秘密』で第52回日本推理作家協会賞を受賞。2006年、『容疑者Xの献身』で第134回直木賞を受賞。『宿命』『白夜行』『レクサイド』『ゲームの名は誘拐』など、多数の著作がある。

ゆめ
夢はトリノをかけめぐる

2006年5月25日 初版1刷発行

著者	東野圭吾
発行者	篠原睦子
印刷所	堀内印刷
製本所	榎本製本

発行所 東京都文京区音羽1 株式会社 光文社

電話 ノベルス編集部 03(5395)8169
販売部 03(5395)8114
業務部 03(5395)8125

落丁本・乱丁本は業務部へご連絡ください、お取替えいたします。

© Higashino Keigo 2006

ISBN4-334-97499-6

Printed in Japan

本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（03-3401-2382）にご連絡ください。

夢はトリノをかけめぐる

僕はネコである。

賢明な読者の皆さんならわかると思うけど、この出だしは超有名な小説の冒頭をパクっている。その小説の場合、この後、「名前はまだない」と続くのだけど、僕には名前がついている。

夢吉、^{ゆめきち}という名前だ。名前をつけたのは、同居人のおっさんである。おっさんの職業は作家だ。いんちき臭い小説を書いて、生計を立てている。

ふだん我々はお互いの生活に干渉しない。そういう暗黙の了解がなされているのだ。例外は病気になった時ぐらいで、そういう場合には僕だってお粥^{かゆ}ぐらいは作ってやる。

で、この日の朝は僕がおっさんに助けを求めることになった。

「おい、ちょっと来てくれ。大変だ」

僕の声を聞いて仕事場から、ぼさぼさ頭のおっさんが現れた。寝ぼけ眼まなこだったが、僕を見た途端に目をまん丸くした。

「わっ、誰だ、おまえ」

「僕だ。夢吉だ」

「えっ、まさか、そうなのか」おっさんは僕の身体をじろじろ見てから首を捻ひねった。「そういうえばそのセーターの縞模様しまには見覚えがあるな」

「僕の毛皮の柄だ」

「ははあ」おっさんは頷うなずいた。「なんでそんなことになったんだ」

「知らん。目が覚めたらこうなってた」

どうなっていたのかというと、本来ネコであるはずの僕が人間の姿をしていたのだ。年の頃は二十歳前というところか。鏡で見たかぎりでは、なかなかの男前だ。

「へええ」おっさんは煙草を吸い始めた。「不思議なこともあるものだな」

ふつうネコが人間に変身したら、この程度の驚きで済むはずがないのだが、ここでもたもたしていたら話が進まないのです、おっさんのリアクションはこのぐらいに留めておく。

「どうしたらいいと思う？」

「まあ、なっちゃったものは仕方がないだろ。せっかくだから人間として生きてみろ」

「えー、面倒臭いな。今まで通りでいいよ」

「何をいつてる。いい若い者が日向ぼつこや昼寝で一日を潰す気か。そうだ、おまえ、バイトをやれ。駅前のラーメン屋で募集してたぞ」

「ラーメンは苦手だ。猫舌なんだ」

「おまえが食うわけじゃない。客に食わせるんだ」

「味見をしなきゃいけないだろ。それに僕が稼ぐと、おっさんの扶養控除額が減るぞ」

「そうか。それは一理ある」

おっさんはテレビをつけた。フィギュアスケートの大会が放送されていた。安藤美姫ちゃんあんどう みきが滑っているのを見て、おっさんは鼻の下を伸ばしている。

「もうすぐトリノ・オリンピックだなあ。ソルトレークからもう四年か。早いなあ」そんなことをぶつぶつ呟いた後、おっさんは膝を叩いてこちらを見た。「いいことを思いついたぞ」

「なんだよ、今度は」

「おまえ、オリンピックに出ろ。金メダルを獲とって、俺に恩返ししろ」

翌日、僕はおっさんと共に札幌行きの飛行機に乗っていた。

「俺が最初に冬季五輪を知ったのは中学二年の時だ。札幌五輪で、日本ジャンプ陣が金、銀、銅のメダルを独占したのを見て以来、スキー・ジャンプのファンになった」

「あつ、それ知ってる。原田^{はらだ}とか船木^{ふねき}とかだな」

「それは長野五輪だ。札幌五輪は一九七二年。それまでは冬のオリンピックなんてものがあることさえ知らなかった」

「僕は今でも、冬季五輪というものがよくわかんないんだけどね。ふつうの人もそうじゃないか。夏の大会に比べると人気がないよな」

「おまえ、いいにくいことをはつきりいうな。でもまあその通りだ。たとえばカール・ルイスとかセルゲイ・ブブカの名前を知らない人は少ないが、ビョルン・ダーリとかマツチ・ニツカネンとなると、どれだけの人を知っているか」

「ニツカネンはジャンプの選手だろ。この間、暴行罪で逮捕されたっていう記事を見た」
「カルガリー五輪じゃ、金メダルを三つも獲ったフィンランドの英雄だぞ。それがトラブルでしか話題にならないとはなあ」

「ダーリっていうのは？」

「ビョルン・ダーリはノルウェーの英雄だ。クロスカントリーの王様といわれた人物で、長野五輪では金メダルを三つ獲った。五輪の通算で金八個。化け物だろ」

「知らなかったなあ」

「とにかく日本では冬季五輪の注目度が低い。ウィンタースポーツのファンとして、俺はそのことがずっと不満だった。なんでこんなふうなのか、ずっと調べたいと思ってたんだ。ちようどいい機会だから、日本人にとって冬季五輪とは何なのかを検証してみよう」

「ずいぶん大風呂敷を広げたな。大丈夫か。それはいいけど、おっさんのその検証と、僕が五輪に挑戦することと、どういう関係があるんだ」

「今もいったように、日本では冬季種目の人気が低い。ということはだ、出場するまでの道のりも夏季大会よりは険しくないってことになる。そのことを確かめようというわけだ」

「ふうん、そううまくいくかな。僕はネコだぞ」

「ネコだからうまくいくこともあるかもしれんじゃないか」

何という樂觀的な見通しだ。

「ところで一言いっておくけど、僕がオリンピックを目指すのは自分のためだから。恩返しとか何とか、意味のわからんことをいってたけど、そんなものは全然関係ないからな」

「おっ、着いたようだよ」

「聞いてるのか、こら、おっさん」

札幌に着いて車で向かったところは陸上自衛隊の真駒内駐屯地まごまないにしか西岡射撃場だった。なんでこんなところに用があるのかとおっさんに訊いてみた。

「そこに、あるスポーツのプロ集団がいるからだ」おっさんは鼻を膨らませている。

「プロ？ サッカーとか野球とか？」

「それじゃ冬季スポーツじゃないだろ。トウセンキョウだ」

「トウセンキョウ？」

おっさんはケータイに繋いだノートパソコンを取り出し、あるホームページを開いた。

『冬季戦技教育隊』というタイトルが出ている。そこには次のようにあった。

冬季戦技教育隊（通称…「冬戦教」（とうせんきょう））は、百八十五万都市札幌に在り、「積雪寒冷地における戦闘・戦技の指導に必要な教育訓練」を担当する戦闘戦技教育室、「積雪寒冷地における部隊運用等の調査研究」を行う調査研究室、「『冬季近代二種（バイアスロン）』・『スキー』の教育訓練」を行う特別体育課程教室及びそれらの支援を行う隊本部からなる陸上自衛隊唯一の冬季専門部隊です。

「ふうん、戦闘訓練をしているわけか」

「まあそういうことだが、実質的にはオリンピック選手を育てている。特にバイアスロンは、日本ではここでしか練習できない」

「どうして？　ていうか、バイアスロンって何だ」

「知らないのか」

「聞いたことはあるような気がする」

するとおっさんは途端にしかめっ面つらをした。

「そうなんだよな。ふつうの人に話すとトライアスロンの変形か、なんていわれる。冬季種目の認知度はどれも低いけど、バイアスロンはその代表格だな」

冬戦教のホームページによれば、バイアスロンというのは、スキーマの距離競技と射撃とを行うスポーツらしい。つまり一所懸命に長い距離をスキーで走りながら、その合間にライフル射撃をするのだ。射撃で的を外したら、ペナルティとして余分に走らねばならないという。

「想像しただけでもめちゃくちゃにきつい競技だね」僕はいった。

「そうだろう。おまけに射撃をするには資格が必要だから、競技人口が少ないのも当然だ」

「なるほど、それで冬戦教でしか練習できないわけか」

「そういうことだ」

「えっ。おい、もしかしたらそれを僕にやらせようというのか」

「そうだ」

「いやだ。そんなきついことはしたくない」

「うるさい、ここまで来たんだから観念しろ。それに本当に競技人口が少ないんだ。冬戦教のメンバーは三十数名しかない。実質的にこれが日本における全競技者数だ。いわば始めるなりナショナルチームに入ったようなもんだ。どうだ。これほどオリンピックに近

い道はないだろう」

「そうかなあ。なんか騙だまされてるような気がするけどなあ」

「それならちよいどいい。騙されたつもりでついてこい」

車は山道を登っていく。着いたところは物々しい門の前だ。二人の自衛官が立っていた。看板に、陸上自衛隊冬季戦技教育隊第一射場ローラースキーコースと記してある。

門をくぐると広大な野原だ。そこにアスファルトのコースが作っており、その上を選手と思われる若者たちがスケートのようなものを履いて滑っている。

ローラースキーだ、とおっさんが教えてくれた。雪のない時期はこのようにしてクロスカントリーの練習をするらしい。すいすい滑っているのを見ると、ちよつと楽しそう
だ。

自衛官の制服をきつちりと着込んだ、いかにも怖そうな男性が近づいてきた。おっさんはその人と二言三言話すと僕を手招きした。

「こちらは冬戦教の広報担当で、スカウトもしておられる中村忠なかむらただしさんだ。中村さん、こいつが今お話しした夢吉です」

「君が夢吉君か」中村さんは怖こわそうな顔を和なごませていった。「以前はネコだったとか」

どうやら事情は伝わっているようだ。僕は、よろしくお願いします、と頭を下げた。

「バイアスロンを希望するとは嬉しいね。選手を集めるのがなかなか大変なんだ」

「スカウトの対象は、やっぱり大学とか高校でクロスカントリー歴のある人ですか」おっさんが訊く。

「そうですね。本当はトップの選手をスカウトしたいのですが、そういう人はほとんど一般企業チームにはいつてクロスカントリーを続けますから……、現状はなかなか厳しいスカウト状況ですね」

「スカウトの際の殺し文句は何ですか。やっぱり、オリンピックに出やすいぞ、ですか」
「それもありますが、まず練習環境の良さをアピールすること、そしてクロカンとバイアスロンの二つの冬季種目でオリンピックを目指す二つの選択肢が持てること、それから銃を撃てるぞ、撃ち放題だぞ、というほうが効果があるようです。でもなかなかすんなりとはいきませんがね」

「障害は何ですか」

「やっぱり自衛隊という名前の抵抗感もあって、職業としての中身をあまり理解されていないということですね。何らかの職業を目指している学生の場合、それでもうアウトです。」

スカウトで冬戦教に入った者には、通常の入隊者よりも高い地位が与えられるんですね」

中村さんは僕たちを射撃場に案内してくれた。ローラースキーでそこまで滑ってきた選手は、即座にライフルを構え姿勢をとり射撃を始める。黒くて丸いのが五十メートル先に五個並んでいて、それを狙うのだ。命中すると黒いのが白く変わる。

「クロスカントリーで息が乱れているのに、よくすぐに射撃を始められますね」おっさんが感心した声でいう。「僕は学生時代にアーチェリーをしていたのですが、息が荒いとなかなか照準器が定まらなかったものです」

「射撃場に近づくにつれて、少しずつ息を整えていくということはあります。でも世界の男子のトップクラスの選手だと、あまりはつきりした呼吸・脈拍調整はしなくていいですね。普通に走ってきてそのまま射撃に入っていきます、呼吸・脈拍調整をあまり意識して整えることなく、撃ち始めます。早い選手だと五個の標的を三十秒以内で打ち落として行くこともありますよ」

世界で戦うというのはすごいことなのだなあ。

かわいい女性が力強く走ってきて、ライフルを構えた。その姿は凛々しくて格好いい。

どことなく広末涼子ひろすえりようこに似ている。

「あの人、かわいいね」僕はいってみた。

「そうだな」おっさんにもやけ面だ。げん

「目黒香苗めぐろかなえです」中村さんが教えてくれた。「今、一番期待している選手です。トリノ五輪の出場も内定しています」

教えてもらったプロフィールによれば、目黒選手は日本女子体育大学の出身で二十七歳。バイアスロンを始めたのはもちろん自衛隊に入ってからで、それまではクロスカントリーの選手だった。ワールドカップに参戦したのは二〇〇三年からで、昨シーズンの最高成績は八位。走力は世界でも十位前後で、今シーズンは表彰台も狙えそうだという。

「旧姓は鈴木すずきです」

中村さんの言葉に僕たちは驚いた。

「えっ、旧姓？」

「はい。旦那はソルトレーク五輪でバイアスロン代表選手になった目黒宏直ひろなおです」

どうやら人妻らしい。おっさん、ちょっとへこむ。

現時点では目黒香苗選手のほか、男子では井佐英徳いさひでのり選手が五輪代表に内定しているそう